



しつちこれに詮すたゞもといふ事たるはいひゆるぬがごとく多う。その
人ぞくくろくもあつてしつち。

一 上巻の指辭の部は下巻は格と除きて三格の外は辭の置と
又心ねともりぬべき用ひざるをいひて歎し下巻は受辭の部は
彼指辭の部に出さば皆除きて下の文辭の置とさうていふなり。さてかく
そのまゝにさあつて格とさうせんよりさうやく世に普く弘めて置れ
ちよれえられし人目よりいふたよりいふんとて三格の格とさう
いふまゝにさうていふとさうせんよりさうやく世に普く弘めて置れ
玉の端二巻の品とされし。下より上より立てては置るのりさうやく章句
抄は此のいふよりさうていふとさうせんよりさうやく世に普く弘めて置れ
さうやく世に普く弘めて置れ。又二重よりさうていふとさうせんよりさうやく世に普く弘めて置れ

いへて稀なるものなり文をくればその混して章句もくくるとも多う
その明らざるはさうていふものなり。さうていふとさうせんよりさうやく世に普く弘めて置れ
もれり。さて、さうていふとさうせんよりさうやく世に普く弘めて置れ
なり。又五巻のさうていふとさうせんよりさうやく世に普く弘めて置れ
の辭とものなり。本書も漏れられしはこれ。本書の追加とさうて
いふとさうせんよりさうやく世に普く弘めて置れ。

一 此書たるは元より學者は及ぶ。いそのあが。さうていふとさうせんよりさうやく世に普く弘めて置れ
おとてのわさうていふとさうせんよりさうやく世に普く弘めて置れ。文字は雅俗とも拘く。其れ
おれし。さうていふとさうせんよりさうやく世に普く弘めて置れ。俗言俗字を用
ひてさうていふとさうせんよりさうやく世に普く弘めて置れ。
一 此の目録をさうていふとさうせんよりさうやく世に普く弘めて置れ。本書の

箇條も、多うばふる省なれば、これより物の目録を擧んとをぶつ
しつり、明んともしつり、半上巻も、その後そのや何とて、ひかりて
おし下巻も、これに紐鏡は三指の辞どもをほいて、其末、玉の緒、二巻よ
こほり、いふ出せ、受辞どもの中に、おしつり、おしつり、おしつり、おしつり
て出しつり、大う、おしつり、おしつり、おしつり、おしつり、おしつり、おしつり、おしつり

天保六年十一月

橘冬照識

助辞本義一覽上卷

橘守部述
同冬照撰

上指辭部

〇

下卷三博上段指辭 紐鏡 右行

もの音は、又齒、葉、羽、端、な、の、如く、物と切分り、離つて、一統あり、
一統と、總て、此音に、一音毎、言は、統、五統、は、ある、
その一統を、いふ、此事の考へは、五十音圖説、詳く、擧、その音にて、云
詞れ上、離、放、葬、拂、投、撥、掀、掃、散、等、は、較多、る、也、此故、より、さ、る、に、
此の辭を、た、と、い、ある、物、を、是、れ、と、云、て、取、分、る、時、を、殘、る、ハ、即、て
わ、る、き、や、う、と、云、ん、又、さ、ら、は、字、し、と、分、ら、る、に、は、明、暗、ま、を、暖、つ、な、り、し
や、う、は、あ、ゆ、る、り、を、以、て、推、を、た、奇、し、言、は、さ、る、つ、と、云、七、を、に、分、ち、て、い
辭、秋、は、き、く、と、云、と、云、も、夏、を、分、ち、て、之、辭、多、り、其、中、は、輕、と、重、と、有、て、
が、ち、分、る、程、な、ら、ぬ、也、ゆ、り、ま、と、程、を、れ、れ、辭、至、て、輕、く、用、い、る、を、あ、る、
の上、を、更、て、を、皆、分、ち、て、云、方、より、出、る、を、也、又、此、は、一、歎、息、此、一

此古今多し。たゞ對して人けあぶぬる方を指定め。後撰ふるまふに
船に對して。教分たふるまき方を指定めいす也。

古十八

神あ月しづれふちむるあまのむねのあまのむねことぞこれ
おむれむれむれもあまのむねのあまのむねのあまのむねのあまのむね

此類を指定めしる下。かると云受辭を省る也。是と云の結ぶ。あまの
言して結ぶぞとらる。既しけの條ふ并へるまづなりし

古十五

そむるんそむるんそむるんそむるんそむるんそむるんそむるんそむるん
の下。彼ると云受辭を省るなれば。れよまらむし。同例よ。只いひの
れるのふれ。連へるなり。

古十二

わがこゝろをさしりて。こゝろをさしりて。こゝろをさしりて。こゝろをさしりて。

古十四

五の條。此れと。かゝりて。と云て五種に分てらる。あつるまじし。こゝ恒は上句
の條にて。其と指置て。次はゆゑなり。をていひて。結ぶ例あるを。
之此格を。彼へけり。くる詞を上句の間。皆いひあせ。故に。その指辭と。そ
を此格と。めまて。引下。來て。即て。ありと。ぞ。以て。押へる也。そ。此條のぞ。れ
あ。つ。ば。い。も。切。り。て。あ。る。を。然。り。押。へ。る。下。の。言。れ。含。る。也。此。の。ハ。多。く
な。り。う。上。指。と。下。を。押。る。の。二。の。心。を。と。今。の。俗。言。以。て。い。は。れ。其。が。然。り
去。去。た。是。ハ。列。と。上。と。も。彼。去。去。ノ。コト。ハ。如。此。其。置。方。な。り。也。ゆ。え。も。此。云。つ
い。し。又。の。く。句。れ。終。置。れ。ぞ。と。ぞ。ヨ。と。の。言。れ。含。れ。も。俗。言。に。彼。事。ハ。云
ソ。ヨ。と。も。其。事。ハ。去。去。其。と。も。去。即。此。等。の。コト。を。其。よ。の。訛。傳。へ。る。言。なり。又
奇。此。や。ら。の。ぞ。と。受。て。へ。る。ま。ま。ぞ。と。に。云。へ。時。ぞ。と。り。り。と。云。云

一本はふくもとあり

そ七

古一
いづりてもあはれおちゆれしやの梅ぞ
は於て
いそまじくあはれおちゆれしやの梅ぞ
これハ問ふ也。ぞよも問あるを今俗言ハ其者何正其波公難
其まじくもあはれおちゆれしやの梅ぞ
引出らるるは問ふ也。即ちひる世をさかぬるは俗言と
たづねゆるは問ふ也。

そ七

いづりてもあはれおちゆれしやの梅ぞ
いづりてもあはれおちゆれしやの梅ぞ

あ七三

いづりてもあはれおちゆれしやの梅ぞ
玉の結よれりわを只流しよのせと敷せもたひたり。やハに通ふや
いづりてもあはれおちゆれしやの梅ぞ
呼ぶもかて問ふもまてはあはれおちゆれしやの梅ぞ
右の奇ども以てあはれおちゆれしやの梅ぞ
まじくもあはれおちゆれしやの梅ぞ
あはれおちゆれしやの梅ぞ

いづりて

後十六
みづりてもあはれおちゆれしやの梅ぞ
あ七五
あはれおちゆれしやの梅ぞ
あはれおちゆれしやの梅ぞ
あはれおちゆれしやの梅ぞ

と云類そ、右に勸む方より派れて、嚴重なる方へ往る也。又齋忌努力ユンイシムイム、勤齋忌禁ユンイシムイムなれば、彼勸む方よりやうてちうく入て、しづむ方より
れる也。然やの音の、とてこれ統トウハ是等なる局らざれば、大方てはをけの上
に用ふる處ハ、疑ひと、歎息と、喚問との、三四種のみなれば、そを只く用
ある音の統トウの、とあつて、諭スチと、呼コトと、とて、彼カと、叫サケび、と、愕オホエ
かど、云類そ、右に急速なる統也。急ニハカに飛ぶ物と、箭ヤと云う如し、又事之甚
切キレなる時、阿那耶アナヤと歎き、阿夜尔喪アヤニカシと恐るも、愕オホエと固カタむ心ココロをいして、
彼イカシ、嚴重と、齋忌シとの、歎ト也。即チ身ミ受て、苦クく疼シと、皆イ、辛シ、痛イと云
いとも、合カせり考カウふて、又、や、や、とて、や、とて、や、とて、喚ウゆる、然も、急速
なる方へ統トウたる也。又續記詔詞シ、藤原朝臣麻呂等伊百海王敬福伊
妹命夜、万葉、妹與汝イ、汝ニ、などある、夜イ、と云ふも、古事記シ、我那迹
の通音トウとして、即呼コトゆる、より出デる也。かくて、此喚ウ、言コトれ、中ナカ、や、い、う
に、や、や、の、を、喚ウ、ゆる、中ナカ、問ト、ふ、事、あり、同ドウ、か、へ、中ナカ、に、呼コト、由ユ、と、
疑イ、へ、事、あり、是より終ハシ、疑イ、の方ハ、一統派イツトウハ、れ、事、あり、即チ、幾イカニ、如何イカニ、の、い
も、疑イ、の、や、れ、通音トウ、なる、と、い、ひ、て、し、せ、れ、ば、也、疑イ、の、や、上ウ、置シ、て、や、何、
や、い、う、に、な、ら、ぬ、て、何、や、い、う、や、と、い、は、せ、る、も、此、故、也、又、を、續シ、き、さ、せ、せ、
右の歎息と、喚ウ、と、問ト、と、を、い、づ、れ、も、急、速、の、一、統、な、ら、ば、皆、因イ、一、切キ、と、詞、
より、か、れ、る、也、然、も、れ、る、の、中ナカ、を、手テ、と、の、事、を、い、ふ、べ、し、例レイ、の、三、指、
格カク、を、あ、ら、た、出、さ、せ、ん、

古一
谷コ、う、ち、の、ゆ、く、る、こ、の、ひ、さ、と、は、ら、う、づ、さ、ま、や、ま、の、ち、う、む、
後ノチ、於コ、
い、づ、れ、く、あ、ら、う、か、ら、ま、る、わ、が、も、い、れ、あ、の、ま、ね、い、う、は、ら、う、ら、ま、
此、類、を、や、の、指、辭シ、と、も、あ、つ、て、あ、ら、う、の、下、に、ナ、ラ、う、と、い、ふ、と、も、ま、い、ひ、が、
ら、れ、故、く、省シ、る、也、され、ば、上、に、の、條、を、も、ナ、リ、ケ、リ、と、省シ、ま、し、の、條、を、も、
古一
谷コ、う、ち、の、ゆ、く、る、こ、の、ひ、さ、と、は、ら、う、づ、さ、ま、や、ま、の、ち、う、む、
後ノチ、於コ、
い、づ、れ、く、あ、ら、う、か、ら、ま、る、わ、が、も、い、れ、あ、の、ま、ね、い、う、は、ら、う、ら、ま、
此、類、を、や、の、指、辭シ、と、も、あ、つ、て、あ、ら、う、の、下、に、ナ、ラ、う、と、い、ふ、と、も、ま、い、ひ、が、
ら、れ、故、く、省シ、る、也、され、ば、上、に、の、條、を、も、ナ、リ、ケ、リ、と、省シ、ま、し、の、條、を、も、

是を疑の方なれ、續く辞より受て、ニのやと下、續く結ぶる也。

新古十七
あまの川かひらきつにいとけんきふらぬ^{ニ格}や。ちらふ^{イカニ}や。

千十四 異又
わられ^{イカニ}や。あまのやうふ「あまのふとまきしあふれ^{イカニ}の^{イカニ}。

これらも同ふまれば切て詞より受て、ニのやと下と結ぶ^{イカニ}

と合みく切て、やをまぬ^{イカニ}か、るやうつ^{イカニ}ありし^{イカニ}や。

か^{イカニ}霞や^{イカニ}う^{イカニ}た^{イカニ}た^{イカニ}のち^{イカニ}や^{イカニ}か^{イカニ}か^{イカニ}に^{イカニ}疑

いの方れ、續く辞の格もあふと、玉の緒^ニ混し^{イカニ}も言れ本義と得ざり

故な^{イカニ}又疑^{イカニ}のやと^{イカニ}重ねて、^{イカニ}結び^{イカニ}もあふ、万葉四^{イカニ}かくと

やれ^{イカニ}や^{イカニ}ん^{イカニ}。同セ^{イカニ}か^{イカニ}か^{イカニ}や^{イカニ}や^{イカニ}老^{イカニ}さん^{イカニ}た^{イカニ}の^{イカニ}と^{イカニ}し。

や何

後十三
あまの川かひらきつにいとけんきふらぬ^{ニ格}や。ちらふ^{イカニ}や。

新古十七
あまの川かひらきつにいとけんきふらぬ^{ニ格}や。ちらふ^{イカニ}や。

あまの川かひらきつにいとけんきふらぬ^{ニ格}や。ちらふ^{イカニ}や。

あまの川かひらきつにいとけんきふらぬ^{ニ格}や。ちらふ^{イカニ}や。

あまの川かひらきつにいとけんきふらぬ^{ニ格}や。ちらふ^{イカニ}や。

あまの川かひらきつにいとけんきふらぬ^{ニ格}や。ちらふ^{イカニ}や。

あまの川かひらきつにいとけんきふらぬ^{ニ格}や。ちらふ^{イカニ}や。

あまの川かひらきつにいとけんきふらぬ^{ニ格}や。ちらふ^{イカニ}や。

あまの川かひらきつにいとけんきふらぬ^{ニ格}や。ちらふ^{イカニ}や。

あまの川かひらきつにいとけんきふらぬ^{ニ格}や。ちらふ^{イカニ}や。

あまの川かひらきつにいとけんきふらぬ^{ニ格}や。ちらふ^{イカニ}や。

あまの川かひらきつにいとけんきふらぬ^{ニ格}や。ちらふ^{イカニ}や。

あまの川かひらきつにいとけんきふらぬ^{ニ格}や。ちらふ^{イカニ}や。

あまの川かひらきつにいとけんきふらぬ^{ニ格}や。ちらふ^{イカニ}や。

あまの川かひらきつにいとけんきふらぬ^{ニ格}や。ちらふ^{イカニ}や。

あまの川かひらきつにいとけんきふらぬ^{ニ格}や。ちらふ^{イカニ}や。

あまの川かひらきつにいとけんきふらぬ^{ニ格}や。ちらふ^{イカニ}や。

百十七

梅のしづはきしづきとていふもあはれなるものなりけり

ホカノ時

はなはたしづかきしづかきとていふもあはれなるものなりけり

もあはれなるものなりけり

もあはれなるものなりけり

他は人をもてたれし

古十四

ふらふらめきのうらみとていふもあはれなるものなりけり

後十一

きしづかきしづかきとていふもあはれなるものなりけり

後四

ふらふらめきのうらみとていふもあはれなるものなりけり

古十二

ふらふらめきのうらみとていふもあはれなるものなりけり

後十二

ふらふらめきのうらみとていふもあはれなるものなりけり

古十一

ふらふらめきのうらみとていふもあはれなるものなりけり

後十一

ふらふらめきのうらみとていふもあはれなるものなりけり

古十

ふらふらめきのうらみとていふもあはれなるものなりけり

後九

ふらふらめきのうらみとていふもあはれなるものなりけり

古九

ふらふらめきのうらみとていふもあはれなるものなりけり

後八

ふらふらめきのうらみとていふもあはれなるものなりけり

古八

ふらふらめきのうらみとていふもあはれなるものなりけり

後七

ふらふらめきのうらみとていふもあはれなるものなりけり

